

「ありがとう AMDA」

難病のコソボ男児 治療終え岡山訪問

来月帰国へ

アジア医師連絡協議会（AMDA）の支援で、金沢大学付属病院（金沢市）で目のがんの治療を受け、退院したばかりのユーゴスラビア・コソボ自治州のアルバニア系住民、ネジール・シニックちゃん（3）と両親らが二十日、帰国を前に岡山市榴津のAMDA本部を訪れ、メンバーらに、日本語で「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えた。ネジールちゃんらは十二月初めに帰国する。

ネジールちゃんは今年三月、目のがんである網膜芽細胞腫と診断され、ユーゴ・ベオグラードの病院で右目を摘出。左目にも転移が

日本での
支援仲介
両親「とても幸せ」

見られたが、北大西洋条約機構（NATO）による空爆の混乱で、十分な治療が出来ず、現地で緊急救活活動を行っていたAMDAのメンバーが日本国内で支援を呼び掛けた。このため、同付属病院が七月から、両親と来日したネジールちゃんに化学療法、放射線治療などを行い、ほぼ完治。今月十七日に退院した。

新幹線のおもちゃで遊びながら、たどたどしい日本語で「ありがとう」とマイクに向かって話し、父親の「感謝している」という言葉以外に見つからない」と話し、母親のヒュルメータさん（40）も「とても幸せ。日本の女性のみんなに感謝している」と喜びを語った。

ネジールちゃんは帰国後、経過を見るため、コソボのアリシュティナ医科大病院に入院するが、岡安利治・プロジェクト推進局長は「来日した時とは、見違えるほど元気になった。コソボでの医療状況は厳しいが、日本から医療器具を提供する話も進んでおり、期待が持てる」としている。

インドのサイクロン被害

「農村、壊滅的な状況」

AMDA
医師
報告

十月末、サイクロンによる被害を受けたインド東部の緊急医療支援を行っていたアジア医師連絡協議会（AMDA、本部・岡山市）の医師、調整員三人が二十日、帰国し、「被害は悲惨。農村は壊滅している」と現状報告した。

同サイクロンは十月十八、二十九日の二度にわたり、インド東部を襲い、オリッサ州を中心に二万五千人以上が死亡したとの報道がされている。

同チームは、二階堂修医師（33）、西村肇（40）、高松知文（27）両調整員の三人

元気になったネジールちゃんと母親のヒュルメータさん（岡山市榴津のAMDA本部で）

